

五〇）。

服部が三木の親鸞論を高く評価した最大の理由は、三木が親鸞を従来の「護国思想家」から解放し、「人間」として描き出したという点にある。「王法為本」「仁義為先」などというのは、蓮如の作文であって、親鸞においてはまったく見出されない——このように親鸞を脱護国化する三木の試みは、服部にとって、「宗祖」を護国思想家として喧伝してきた蓮如以来の真宗教団から親鸞を決別させるものとして理解された。三木が哲学的に探求した親鸞思想を、服部は歴史学的に証明しようとしたのである。

親鸞から神話性を剥ぎ取り、これを真宗教団から分離させる——それは、「農民と女性」（服部「三木清と「親鸞」」一九四七）とともにあった人間親鸞の復活であり、畢竟堂班制度を始めとする募財活動に困しむ農民を教団から解放することであると服部は考えた。血脈相承の法主制を否定した彼は、無教団派親鸞主義とでも言うべき結論に到達したのである。それは教団教義に左右されない自由な親鸞論を語る場を提供するものでもあった。

戦後の親鸞研究における「〈農民〉とともにある〈反権力〉の親鸞」というイメージは、服部が、その因縁浅からぬ三木清によってルールが引かれた親鸞の「脱護国化」とともに、「本願寺教団の民主化」（一九四八）の理論的基礎となる親鸞の「脱教団化」という営為を通して形作られたものであった。それはまさに服部における「生得の因縁」の成せる業であったと言える。

圭室諦成著『葬式仏教』再考

ライアン・ワールド

いつから、誰の提言によって「葬式仏教」という表現が流行り出したかは不明であるが、少なくとも一九六三年に曹洞宗の圭室諦成（一九〇二—一九六六。当時は明治大学文学部教授）が著した『葬式仏教』（大法輪閣出版）によって、その名は巷間に知られるようになった。今日、この表現は葬式・葬儀に「安住」とするとされる伝統仏教教団（こう断言することは妥当かどうかという問題は別として）を批判する際、よく使われることは周知の通りである。

しかし、圭室の『葬式仏教』や、またこれに関連する彼の他の論文などをひもとくと、ことはそう簡単ではないことがわかる。むしろ、圭室が提供した「葬式仏教」論は、ある意味では葬式・葬儀を肯定しているふしすらうかがわれる。一例をあげるとしたら、次の文章はそのことをよく表していると思う。

維新以後の仏教の活きる路は、葬祭一本しか残されていない。そして現在当面している課題は、古代的・封建的な、祝術的・祖先崇拜的葬祭を精算して、近代的な、弔慰的・追悼的な葬祭儀礼を創造することである。仏教者は、この現実眼をつぶって、いたずらに幻想の世界を彷徨している。

（二一〇頁）

つまり、現在、日本仏教教団の「活きる路」は葬祭のみにあるが、伝統的な葬儀行事をそのまま持続することはもはや時代錯誤ということなのである。そして、これに代わって伝統仏教教団が「近代的な葬祭儀礼」に切り替える必要性を、圭室は主

唱していると解釈することができよう。おそらくではあるが、圭室の主張は、キリスト教（プロテスタント）による告別式のような葬祭をしなければ、伝統仏教教団の「活きる路」はなくなるということであった。彼のこうした見解が一〇〇%正しいかどうかは断言できないが、戦後における「檀家離れ」という現象をはじめ、「直葬」、「生前葬」、「散骨」などといった新しい葬式の形態の台頭を勘案すれば、その主張には一理あったと認めざるをえない。

いずれにしても、圭室が用いた「葬式仏教」論は、現在しばしばみられるような、「葬式はいらない」といった極論ではなかった。このような意味において、今日、否定的な表現としてありがちな「葬式仏教」批判と圭室の「葬式仏教」論の間には、そのニュアンスにいささかの相違があるといってもよいのではなからうか。

戦後日本仏教と民俗学——五来重の場合——

碧海 寿広

仏教民俗学の創始者として知られる五来重（一九〇八—一九九三）については、二〇〇〇年代以降にいくつかの研究が出されてきた。「民俗資料を使った仏教史」としてその学問の方法論的な側面について考察した林淳、近代の哲学的な仏教観を批判する実践の仏教思想家として五来を評価した碧海寿広、五来の言論は「近代仏教」が切り捨てた「民俗」「俗信」を学問的に救出したが、他方で同時代の「新宗教」「迷信」は蔑視・排撃したと指摘する土居浩、などの成果である。本発表ではこれ

らの先行研究をふまえつつ、戦前から戦後にかけての五来の学問形成と展開、その背景や特質について考察する。

東大で仏教学を学び、紀平正美の哲学講義に魅了されて「龍樹の『中論』の八不中道を、ヘーゲル弁証法によつて解釈するというテーマ」を卒業論文に選んだ五来は、しかし大学卒業後、民衆信仰が濃密に息づく高野山の実情を目のあたりにしたことで、仏教学が扱う仏教とは「まったく異質の仏教があることを知り、そうした「生きた日本仏教」への関心を深めていく。その後、京大の大学院に在学中、柳田国男の講演を聴いて衝撃を受けた彼は、さらにその後に柳田の「毛坊主考」などを讀んだことで「自分の学問の方向が決ま」り、「それまでならった教団中心の仏教の歴史のもつむなしさというもの」から「一ぺんに解放」された。それから全国の民俗調査を独自に行うようになった彼は、戦時下の昭和一六年に初めての公開論文「弘法大師伝説の精神史的意義（上）」を発表する。これは、全国の大師伝承から「日本（民族）精神」を抽出するという趣旨の論文で、時局的なテーマ設定が色濃いが、しかし他方で、文字言語に対するオーラルな資料の優位を、また民衆文化の意義を強調しており、戦後の彼の学説を予感させるものであった。

戦後しばらく後の一九五二年、五来は「仏教と民俗学」という論考を発表し、「仏教民俗学」という新たな学問を宣言する。そこで五来は、「一般仏教徒の信仰の深化または拡大」に役立ってこなかった近代仏教学を批判しつつ、「現在各仏教大学の宗門教育に共通する一つの弱点」として、若い僧侶が大学卒業後に「自分の寺へ帰ってから、檀信徒のあいだにおこな